謡詠であり、最後の一章をまとめたものである。最初の十頁のうち、道綱の『安楽集』に典拝すると思われる三首を除いて、全て道宣の『続高僧伝』に依ると考えられるが、最後の一章だけは、迦才の『浄土論』『徳人相観章』の文を典拝するものである。それについては、まだ後で考えていまい。

最初の一章は、

一　本師般若和尚は、菩提流支のしえにて、仙経ながゆきしてて浄土にふかく帰せしめき、まず、般若の捨婆帰浄という美事な回心に関する謡詠である。

『続高僧伝』の次の文に依るものと思わる。

行きて洛下に至り、中国三蔵菩提流支に逢う。般若をひいて啓して曰く、仏法の中、顕る長生不死の法にし、此の土の仙経に勝者有りやと。留支、地に唾して曰く、是れ何なる言ぞや。相ひ比するに非ざる。此の方仲にか長生の法有る。縦ひ長年のを得て、少死せざるも、終には更に三有を輪廻せんのみとも。

即ち般若を以て之を授けて曰く、此れ大仙の方なりて、二に依りて修行せば、聖に生死を解脱するを得べしと。
暁鶯は美事な行実として、教えているのである。親鸞は、自力の延長線上に想い絵を補助的仏道に選んで、徹底した自力無功の懸命に開かれる願生浄土の仏道を教える教説として、暁鶯のこの回心の行実をまず第一に賛えているのである。

四論の講説をし、本願他力をきたす。

具縁の凡縁をみちびき、涅槃のかどにぞいらしめし。

過才の『浄土論』の方には、洞察の浄土経に喩えうそして、四論の学仏であったことは言葉として、あらゆる人間の命の祈りとともにといえる如来の本願に立つ仏道である。そこに群萌と共にあたった暁鶯を賛えているのである。

過才の『浄土論』には、そのような暁鶯の様子がよく伝わっている。人々が集まり、大衆は声を出し合い、弥陀仏を念仏して、観無量寿経の価値を初めて強い意識され、ものそのものであった暁鶯を想いながら『具縁の凡縁をみちびき』と賛えただろう。

暁鶯の教説は、-aligned-
弥陀仏を念じた」という迦才の『浄土論』の記事は、毘辯法師を読んでいくと、上述の通りである。

「従来の文章の流れは、仏教の法師の伝記や迦才の『浄土論』に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見られるのは、当寺の伝記や迦才の伝記に見される
のような道徳の意図や『安楽集』の文章の流れを無視して、
毘沙門天王の凡夫の自覚だけを抜き出している。そこだけ極端
にスポットライトを当てて、毘沙門の伝記の重要な部分とし
ているのである。その意義については、後に改めて考えて
みることとする。

さて、次の五首。

六首の主軸として井州の大巖寺にぞおわしるのよ

七首の天子はとうとみて神鸞とこそ号せしかお

八首の天子がきたいたり、浄土の往生とけたまう。そ

のとき、霊山不思議にて、一切道俗帰敬きき

に、汾州汾西秦陵の、勝地に霊廟をたてまう。

この五首は、いずれも『高僧伝』の次の文章に依ってい

るものと考えられる。

自行化他、流麗弘広なり。

魏主の重んじて号して神鸞と為す。勅を下して

井州の大寺に住せむ。毎に復た移りて汾州の北山石

壁玄中寺に住す。時に介山の陰に往き、徒を聚め業を

すすむ。今、鸞公巖は号するは是れなり。魏の興和四年を以て、疾に因って平遙の山寺に卒

す。春秋六十有七。中略。

勅を下してより汾西の泰陵の文谷に葬る。塚塔を作りし、

井ある為に撫を立つ。今並び存す。}

で浄土往生を遂げたことが、譲えられている。天子は鸞鸞

を神鸞、あるいは鸞公巖と呼んでかやりない尊敬を表わし、

帰来の浄土の山寺に移り、魏の興和四年に六十七歳

に玄中寺から平遙の山寺に移り、維の興和四年に六十七歳

に玄中寺から平遙の山寺に移り、維の興和四年に六十七歳
（延暦）

いかも思う。もちろん晚年的僧院の行はも大切であるが、それとも、その全体が「世俗の君主」の帰依を一身に受けた念仏者、僧院に、親鸞は「超世」という意味を仰いだのであろうか。僧院は言うまでもなく「生死いずべき道」で、徳川の天子の帰依で、ない。それ故、その「超世」の最も具体的とし	た超世の実事を生きていた僧院、その僧院をこそ親鸞は仰いだのだと思う。

さて、最後の三十四首の和讃について考えてみたい。十一首からの三十四首までは僧院の伝記の讃詠の後、言うまでもなく、これまでの十首の僧院の伝記の讃詠の後、十一首から三十四首までの二十三首は、天親の『清浄論』を訳詠した僧院の教育の功績を讃えたものである。十一首目の和讃には、「十一天親菩薩の心行いかざるならば」と読まれていることからも、よく分かる通りである。

他に、皆に何度か発表しているように、僧院の『清浄論』は、『清浄論』の一字一句の訳詠ではあっても、その教道観は、天親と違っている。インドの大乗仏教は、誰もが任運無用に自利利他を行じる菩薩となることを大乗と
善薩と讃えて、三十四首目の和讃が置かれたのであると思う。

三十四首目の和讃は、善薩の天子菩薩は、おわせしか

たつねにむき、驚駭をとらしする。

最後に暦鶴の全体を讃えるこの行実だけは、『続高僧伝』
に依るのでなく、迦才の『浄土論』の、次的文章に依っ
ている。

洞らに暦鶴に喚かにして、独り人外に出たり。楽

の手も書くとריק、『論註』の加点の終った

いう、あの法然上人の眼の当りにした感動を、つまみ、愚

文章で実感したものであろう。だから親鸞は、この文章に依っ

て、鸞鶴を龍樹、天親と並ぶ菩薩と仰ぎ、『論註』を『詣

さば、これまで尋ねたように、鸞鶴の伝記を讃えた和讃

のうち、三十四首目と『安楽集』からの三首を除いては、

して、『続高僧伝』に依っていいた。鸞鶴の伝記としている

伝には、おおよそ次のようなことが伝えられている。

鸞鶴は五台山の近くの雁文に生まれた。伝記としていること

を訪れ、文殊菩薩の霊跡に感動し出家した。出家後は四論
のは学問であった。その親鸞は、『大集経』の詮釈によって、

病に倒れた。あるとき秦陵の故地で霊感を受けて、病気はい

るが、生命に不安を感じては、その仕事も完成しないと。

長生不死の仙方を求めて、江南の陶隠居を尋ねることを決

二
意した。江南旅行の途中、梁の武帝と仏性の義について論議した。
さらに毘婆耶、陶淵明への来意を告げると、武帝は、毘婆耶に次のようなことを言うのである。私は彼を度々召しれて、とも、彼は一度もそれに応じたことはない。だからあなた、何故に来備したいかであろう。と。しかし、毘婆耶、陶淵明にいる茅山に着くと、彼は遠来の客を丁重に迎えて、毘婆耶の巻を授け、その来意に黙らしたのである。
帰途、毘婆耶、陶淵明に至り着くと、江の神の毘婆耶が、江に波をたてた。彼は江を渡れなくなくなった毘婆耶は、毘婆耶の卷を渡して、彼の来備したことを述べた。武帝は、彼の奇瑞に感じて、江の神のために毘婆耶を建てた。
さらにその後の記述では、毘婆耶の著作が掲げられて、その功績が讃えられている。そこでは、仏教関係の著作だけではなく、『調気論』といった医学の著作まで掲げられていて、彼の名がとおりに讃えられている。（『毘婆耶』）
その後、毘婆耶は、毘婆耶、陶淵明の卷を渡して、彼の伝記を讃えるように、毘婆耶は、『毘婆耶仏教』で彼の伝記を讃えようとした行いは、三つであると思う。一つは、徹底的に汚れた自力無功の自覚を契機とする回心の行実。二つには、自力無功の自覚の内実である凡夫の自覚。これに述べた通り、この報命集に義を依ったものであり、しかも進観の意図を無視して毘婆耶が毘婆耶の凡夫の自覚にだけスポットを当てたものであった。さらに三つには、すでに尋ねた通り、超世という意義を持った行実。の三点である。
と思う。

《曇鸞和讃》では、この三点について讃えられているが、
「正信偈」では、よく知られているように
本師曇鸞は、梁の天子、常に讃のところに向こうして
菩薩と礼したまえる。

三歳流支、浄教を授けしかば、仏教を熾焼して楽邦
に帰したまいき。

と詠まれて、超世と回心の二点にまとめられている。さら
に『尊号真銘経文』では、『正信偈』の超世を表わす部分
典拠となった僧才の『浄土論』の文章、即ち先に述べた
『論註』の加点の後に親鸞が引文している文章であるが、
それだけが挙げられ、その文章を親鸞は、詳しく註釈して
いるのである。

このように、『曇鸞和讃』で親鸞が讃えた曇鸞の行実は、
心の自覚の実である凡夫の自覚であると思う。《曇鸞和
讃》

心の自覚の実である凡夫の自覚であるとする。さらに、
超世と回心に加えるとすれば、回
目のあるのである。
私は私先、インドの大乗と中国の大乗について一言した。中国の大乗は、法の普遍性を表わす一乗として展開したこと、を述べた。その際、最も問題になるのが、仏道にされた「五逆讃誡」の問題である。そのような「外道凡夫一乗」がわずかぬことを、「論註」八番問答で、身にその証明し、一乗を顕揚した方、仏道である。親鸞が浄土の祖師として仰いだ曼荼羅である。「論註」を学ぶ時の最も大切

は、親鸞が二十九歳の時、法然と面会したあの体験の自覚

 axial

  った感動に立って、その意義を親鸞の行実に徹底して

  教えられ、自覚化していたのである。だから親鸞が出

  進いの体験に立って浄土の仏道を顕揚することと、親鸞の伝

  記を読解することとは、まったく別のことではある。ここ

  では尋ねることはできないが、他の祖師に対する読誦も事

  件は同じ事であると思われる。

  さらに今一つ言われることは、仏道は師との出逢いに極

  まる。親鸞と法然との出逢いに教えられる通りである。自

  法然は四十三歳の時、「一心事念弥陀名号、行住坐臥、

  不同時節久近、念を不捨者、後名正定之業、順彼仏願故」

  という心の善導の文に遇って、「ただそこにある、余行を捨て

  て、ここに念仏に帰しぬ」と回心を表明した。そして、「自

  らを愚痴の法然房と名のつるや、群明と共に生きた念仏する

  事」という善導の文に遇って、「ただそこで、余行を捨て

  て、ここに念仏に帰しぬ」と回心を表明した。そして、「自

  らを愚痴の法然房と名のつるや、群明と共に生きた念仏する

  事」という善導の文に遇って、「ただそこで、余行を捨て

  て、ここに念仏に帰しぬ」と回心を表明した。そして、「自

  らを愚痴の法然房と名のつるや、群明と共に生きた念仏する

  事」という善導の文に遇って、「ただそこで、余行を捨て

  て、ここに念仏に帰しぬ」と回心を表明した。そして、「自

  らを愚痴の法然房と名のつるや、群明と共に生きた念仏する

  事」という善導の文に遇って、「ただそこで、余行を捨て

  て、ここに念仏に帰しぬ」と回心を表明した。そして、「自

  らを愚痴の法然房と名のつるや、群明と共に生きた念仏する
されていないが、宗祖親鸞聖人が仰げた雲鷹像に、『浄土論』を原点として、学ぶ視点を教えられた事だけは、確かである。

注
本文中の漢文は、読み易さを考慮して書き下し的文字とした。

① 野上俊穂著『中国浄土三祖伝』四七頁参照

② 野上俊穂著『観音量寿経 pigment』五九頁参照

③ 同上、六○頁参照

④ 同上、四五頁参照

⑤ 同上、五四頁参照

（弁助教授 真宗学）